

「がん患者」支援研究についての予備的考察**ー研究動向と課題についてー**

○ 佐々木剛生 (007307)

キーワード 3 つ：がん患者，がん患者支援，想い

1. 研究目的

本研究の目的は，社会福祉学における「がん患者」への支援に関する研究動向を整理し，今後の研究の課題を明らかにすることにある。

2. 研究の視点および方法

3 人に 1 人ががんで亡くなると言われて久しいが（最新（令和元年）の人口動態統計では約 27%），がん対策基本法（1 期）が施行された 2007 年以降，「がん患者」への支援に関する社会福祉学の研究（以下，「がん患者」支援研究）も増えつつある。社会福祉（社会事業）史のなかでは，貧困・保育・高齢者介護などに比べれば歴史も研究蓄積も浅いものの，これまでの研究動向を整理し課題を考察しておくことは重要であると考える。

そこで本稿では，その予備的考察として，学術情報データベースの一つである CiNii から抽出した社会福祉学における「がん患者」支援研究を分析し，研究動向と研究課題の考察を試みる。具体的には，CiNii で「社会福祉 がん患者」（以下，A），「ソーシャルワーク がん患者」（同 B）「ソーシャルワーカー がん患者」（同 C）の 3 パターンをキーワードに入力して検索を行い，タイトルや抄録・内容から明らかに社会福祉学以外の諸領域（医学・看護学等）の研究と思われるものを検索結果から除いて考察を行った。

3. 倫理的配慮

一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程等にとっとり，研究を実施している。

4. 研究結果

考察対象となった研究は 30 本であったが（A:16, B:7, C:7），著者の多くが MSW であったことの帰結と思われるが，約半数が著者の職場体験を踏まえた質的研究であった。

30 の業績が対象としている領域を分類すると，退院支援とターミナルケアについての研究が全体の 3 割を超えていた。多い順に，退院支援（6），ターミナルケア（5），患者会（3），がん患者への社会福祉支援概要（3），就労支援（2），社会保障制度（2），その他（いずれも 1 つ）（訪問教育，長期フォローアップ，自己決定，がん患者ブログ，祈り，HBV 感染被害，政策決定過程への患者参加測定，生活機能モデル（ICF），質的研究方法の到達点）であった。

対象となっている「がん患者」の属性としては，研究領域を反映してか，やはり全体の 3 割強が末期がん患者一般であった。末期がん患者一般（11），がん患者一般（7），成人がん患者

一般（4）、小児がん患者一般（3）、思春期・若年成人がん患者一般（2）、乳がん患者（1）、家族性腫瘍患者（1）、肝がん患者（1）であった。

また、研究内容を「1. 医療・治療関連支援」「2. 経済的支援」「3. 患者・家族の生活支援」「4. 保育・教育・就労支援」4つに分類して整理すると、医療・治療関連支援と患者・家族の生活支援の研究が全体の約3割であった。「1および3」（10）、「1-4 全て」（4）、「3のみ」（4）、「4のみ」（3）、「1-4 以外」（3）、「2のみ」（2）、「1,3,4」（2）、「1のみ」（1）、「1および2」（1）、「1-3」（1）であった。

なお、がん対策基本法（1期）施行より前（2006年以前）に発表された業績は4本（約13%）で、全体（30本）の約8割（23本）が2011年以降であり、研究の蓄積が本格化してから間もない分野だといえよう。2000年以前（1）、2001-2010年（6）、2011-2020年（23）。

5. 考 察

以上を踏まえて次の3点を指摘できる。第1に、がん対策基本法（1期）施行以降は緩やかではあるが研究業績が蓄積されつつある。特に、末期がん患者一般を対象とした退院支援・ターミナルケアについては研究業績が相対的に多いだけでなく、退院支援の課題や居宅介護を含むターミナルケアの課題も示されている。共通して指摘されている課題は、退院後の自宅および緩和ケア施設それぞれで療養するために必要な資源（施設・人材）の不足と各種機関との連携促進の必要性である。これらの領域では、現在の到達点を整理し先行研究で示された課題を十分に共有した上で研究を上積みしていくことが期待される。

第2に、末期がん患者一般を対象とした退院支援・ターミナルケア以外の全ての領域で、今後のさらなる研究の蓄積が一層求められる。成人がん患者一般・小児がん患者一般・思春期・若年成人がん患者一般・家族性腫瘍患者への支援も、末期がん患者へと同様に必要である。また、治療中の「がん患者」への支援（と研究）はもちろん重要であるが、治療を終えた「がん体験者」への支援（と研究）も重要であり、保育・教育・就労支援などについて今後の一層の研究蓄積が期待される。「がん患者」・「がん体験者」を支える「家族」への支援の研究の蓄積ももちろん重要である。

第3に、各種組織（医療・行政）や「家族」との連携困難や課題に焦点を当てた研究からの示唆は少なくないが、「がん患者」の想いに焦点を当てた研究は希少であった（約1割：4/30）。不慮の死への覚悟を迫られた「がん患者」の悲愴な想いを非体験者が理解するのは至難だが、「がん患者」の3人に1人がうつ病もしくは適用障害に遭遇すると言われており、「がん患者」の想いを知ることが支援の第一歩だと考える。CiNiiのキーワード検索（がん患者 語り）の結果であるためあくまでも目安であるが、「がん患者」の「語り」に関する研究が54件ある中で、看護学の研究が38件（2002-2006年（10）、2007-2020年（28））あるのに対し、社会福祉学には皆無であった。看護学で重視されている看護の「身体性」が、この違いを生じさせている可能性も考えられる。そうした差異の要因も含めて今後研究を進めていきたい。